

大阪天満宮社報

第52号

てんまつんじん



外宮祈年祭に臨時奉仕……………	2 頁
御羽車講結成六十周年……………	4 頁
「三十六歌仙」奉納……………	6 頁
四花街の芸妓による八処女……………	9 頁
難波之碕顕彰碑の揮毫書家……………	12 頁
「文化サロン源内」参拝……………	14 頁
「天神祭」のフレイム切手……………	16 頁

涼風進上

平成十九年 盛夏

第六十二回 神宮式年遷宮

諸儀式と御準備肅々と進む
外宮祈年祭に臨時奉仕

権禰宜 柳野 等

お伊勢さま、大神宮さんと親しく呼ばれ、また伊勢神宮と紹介されることの多い伊勢の神宮は、正しくは「神宮」と申し上げます。

神宮は皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）の総称で、皇大神宮と豊受神宮の両正宮をはじめ、別宮、摂社、末社が所属しており、これら一二五社の宮社の総称でもあります。

神宮が伊勢にお鎮まりになったのは垂仁天皇の御代で、その後七世紀末の持統天皇の御代には二十年に一度、全ての宮社を新しくする「神宮式年遷宮」の制度がはじまりました。前回は第六十一回で平成五年に斎行され、次回は第六十二回として平成二十五年に予定されています。これは「遷御之儀」という大神様が現在の御正殿から新殿へお渡りになる最も大事な祭儀を行う期日であり、その八年も前から「山口祭」をはじめ様々な儀式や準備が進められていきます。これらは、かつて「皇家第一の重事」とされ、現在も天皇陛下のお

許しを賜って行う重儀であり、日本全国を挙げての祭儀であります。このための費用は、戦前まで国費を以て充てられていましたが、現在は、神宮は勿論のこと、全国の国民崇敬者の浄財によって行われています。

外宮祈年祭に臨時奉仕

神宮では、年間千数百回ものお祭りが行われていますが、これらの祭儀は恒例祭と臨時祭にわけることができます。恒例祭は、年間に定められた月日に行われるお祭り、神嘗祭、六月と十二月の月次祭は、古くから三節祭として重要な祭儀とされ、この他に祈年祭と新嘗祭を加えて五大祭と呼ばれています。この五大祭には、毎年全国都道府県から一名ずつ、一般神職の奉仕が許され、本年二月十七日に斎行された外宮の祈年祭には、大阪府から当宮の柳野等権禰宜が御奉仕させていただきましたので、その時の様子を報告させていただきます。

いただきます。

祈年祭は、今年の稲作を始めるにあたって、稲の無事成長と豊作を祈るお祭りで、秋に行われる新嘗祭と並んで農耕儀礼のうち最も重要な祭儀です。

前日の参籠 外宮

の祈年祭は内宮に先立って午前四時から始まりですが、重要な神事の前日は「参籠」といって、神域に籠もって心身を清めなければいけません。

今回は、前日の二月十六日午後四時前に外宮御正殿を拝礼したあと、齋館に入って高城少宮司より、他の県から奉仕された三名の神職とともに臨時奉仕の辞令を交付していただいて、参籠がはじまりました。

習礼 一般の神社では、大祭などの式次第の多い神事を奉仕する前



には、奉仕する神職は打ち合わせやリハーサルのようなことを行いますが、これを「習礼（しゅらい）」といいます。

しかし神宮の祭儀では習礼は行われないということで、臨時奉仕の神職だけのために、祭儀の流れや拝礼

作法について、祭儀担当の方から丁寧な指導を頂きました。特に役割を担当するものではありませんが、実際の祭儀の中にあるわけですから、邪魔になるなどの粗相があつてはいけませんので、各々真剣な面持ちで習礼を受けていました。

作法について、祭儀担当の方から丁寧な指導を頂きました。特に役割を担当するものではありませんが、実際の祭儀の中にあるわけですから、邪魔になるなどの粗相があつてはいけませんので、各々真剣な面持ちで習礼を受けていました。



午前二時 大御饗儀 夜になって少しの仮眠時間があり、午前三時から着装し、午前四時前になると齋館前に列立し、少宮司、大宮司がお立ちになり、祭主様がお出ましになると、いよいよ参進となりました。神宮祭式は、門外不出と定められて

ていますので、詳細に述べることはできませんが、奉仕神職は祭儀の行われている内玉垣御門の中まで参入を許されて、祭儀の様子を目の当たりに拝見することが出来るのです。神宮の神職でさえ、相当の年数を経た上席の奉仕祭員でなければ拝見できない貴重な光景が、現実に目の前で進行していることに何か別世界にいるような、感動に包まれた不思議な時間を過ごし、座を改めて八度拝の拝礼をするところにな

念の品も賜って、無事滞りなく御奉仕が叶いました。神宮という天下無双の神域において、祈年祭という重儀に奉仕させて頂いたことは、神職として無上の栄誉であり、またある反面、大変申し訳ないもつたいない思いもいたしました。

午前七時 奉幣儀 大御饗儀が終

了して退下したのは夜明け前でした。少しの休憩を挟んで奉幣儀の参進は夜が明けたばかりの時間でした。このお祭りは、勅使が参向して畏き辺りより奉献遊ばされる御幣物を御正殿に奉る祭儀ですから、先の大御饗儀よりは、さらに御正殿に近いところに参入を許されましたので、これもまた再度拝見することはないであろう様子を、悉に奉拝させて頂くことができました。勅使の御祭文が奏上されるまでは、勅使より御正殿に近い位置に飯の着座をしてお

一日足らずの短い時間の御奉仕ではありましたが、本当に多くの見聞をした感じがいたします。今後はこの経験が平素の御奉仕に役立てることを、神宮奉賛のため教化育成に努めますとともに御神縁に深く感謝いたします。

表紙解説「古写天神祭渡御船之図」

紙本着色、二六・七×五〇・二。御座船の船尾の几帳にみえる「梅鉢紋」から、天神祭の渡御船を描いたものと考えられている。御座船の船首に天狗の面が掲げられている。現在の陸渡御で、先触れの催し太鼓に続いて、猿田彦が渡御列の先頭を務めるが、この天狗はその先蹤かも知れない。このような、船首の面が発展して御迎人形が生まれたと考えれば、天神祭の歴史にとって貴重な図柄といえよう。

御羽車講

結成六十年周年記念式典

去る七月十日、御羽車講の結成六十年周年を祝う式典が挙行されました。

午後二時三十分、本殿において「御羽車陸渡御用台車」の修復奉告参拝を行ない、本殿前で記念撮影を経て、天満宮会館・孔雀の間において記念式典が行われました。

まず、瓜生田為次講元の挨拶の後、寺井種伯宮司、片山巖講社連合会会長の祝辞、京極俊明大阪府会議員、久次米義夫氏子総代表らの祝辞の後、和氣満々とした和やかな祝宴が繰り広げられました。

この日の出席者には、小冊子『御羽車講六十年年誌』が配布されましたが、同誌に収められた同講の略史「御羽車講について」を以下に再録しておきましょう。

御羽車講について

◆御羽車とは

御羽車とは、①宮中の内侍所（ないしどころ＝賢所）の遷幸用の乗物、

②あるいは諸社の遷座の際に、御霊代をお遷しする乗物をいいます。

①は、屋外の中央に宝珠形の金銅の葱花（そうか＝擬宝珠）を据え、柱から轅（ながえ＝牛車の前に平行につきだした、丑に曳かせるための二本の棒）まで、すべて白木のままで、蓋下の周囲を帷（とばり＝垂れ布）で覆うのを例とします。これに對して②は、勾欄（こうらん＝端の反り上がった欄干）を巡らした床に轅を付けた、黒塗りの小輿をいいます。

◆最古の史料

大阪天満宮の「御羽車」については、文政四年（一八二二）の史料が最古のようですが、もちろん②のタイプです。それは同年四月五日の正遷宮のために檜材の「御羽車」を新調したという記録なのですが、この史料によって、江戸時代の御神霊の遷座には「御羽車」が使われていたことが判るのです。

江戸時代の天神祭には、御神霊の

渡御には鳳神輿・玉神輿が使われていましたから、御羽車は天神祭以外の遷座用に準備されていたようです。そのこともあってか、史料には、あまり登場しません。

◆御羽車講の結成

そして、明治初年に「御鳳輦」が登場すると、御羽車は一旦、その役目を終えました。しかし、戦後の天神祭復興の気運のなかで、五丁目の中辻喜十郎氏、六丁目の岡本氏、三丁目の前川氏らの発議によって、昭和二十四年に「御羽車講」が結成され、まもなく日吉大社（滋賀県大津市）から大阪天満宮を経由して「御羽車」を譲り受け、御鳳輦とともに、渡御列に奉仕することになりました。現在、当講は天神橋二丁目から六丁目の振興町会と、他地域の崇敬者によって構成されています。



◆ギャル御輿の登場

昭和三十二年六月十四日には、その装飾のために「錦旗」が新調されています。さらに、昭和四十五年にはステンレス製の台車を譲えて、氏地巡行に供することになりました。

また、昭和五十六年には、女性による御輿巡行を企画し、いわゆる「ギャル御輿」を発足させ、マスコミを賑わせています。

（文化研究所・高島幸次）

御神酒講の

猩々人形修復



御神酒講の「猩々山車」が美しく修復され、去る七月三日、修復奉告祭が行われました。

毎年、天神祭の陸渡御に曳かれる「猩々山車」ですが、これまでは装束も傷み、また御顔も薄黒くなっていたため、このたび装束も一新、また、御顔も「猩々」独特の赤ら顔にもどり、今年の天神祭を待つばかりとなりました。

天神橋筋商店街 「チャリティーラン &ウォーク」

去る六月二六日、第一回IAAF世界陸上競技選手権大阪大会の組織委員会は、六〇日後に迫った大会の成功を祈願し、当宮に参拝されました。また、国際陸上競技連盟（IAAF）が大阪大会から始めるグリーンプロジェクト（地球環境への貢献を目的とした環境プログラム）を



より多くの方に知っていただくために、天神橋筋商店街で「チャリティーラン&ウォーク」を行いました。成功祈願には、逸見博昌（大会組織委員会副会長兼事務総長）、千葉真子さん（マラソン 平成一五年世界陸上バリ大会銅メダル）、宮川花子さん（吉本興業のほか、天神橋筋協力商店街からは、井上悟さん（元一〇〇m・二〇〇m日本記録保持者）らが出席しました。

チャリティーラン&ウォークでは、境内で、逸見副会長らの挨拶に続いて、出走者一七名がトラックの合図でスタートしました。日本一長い商店街の二・六kmを「大会開催」のPRと、「グリーンプロジェクト」への募金を呼び掛けながら、約五〇分でゴールしました。

大阪天満宮献詠 風月社

平成十九年上半期秀歌

明治大帝宣^のらせし歌の集ひ早や
壹百貳拾^{もふたせ}年迎ふ目出度さ

選考 浅井與四郎
集ひきて交す言葉も目出度さに

なごみあひつ、開く初釜
幹事 佐野 秀子

月次の和歌会たのし天満宮
集ふ人々なべて和やか
幹事 森本美也子

初春の夢追ふ人ら集ひきて
蓬萊飾り床の間に掛く
西宮 牛田眞理子



初春に吾子ら集へばみどり子は
父の膝へとよちよち歩む

神戸 鈴木 敬子

師の米壽祝ふ集ひの宴うれし
皆晴々と杯をあげたり

吹田 岩城 富子

千早や振る神渡るらし諏訪湖なる
氷割るる音四方に響きぬ

八尾 松村 暁二

嬉々として薄らひを踏む幼兒の
赤き長靴冬陽にはゆる

東大阪 中山 里江

氷雪が解けてぬかるむ奥津城に
至る傾りに咲ける水仙

大阪 松村龍太郎

ふきのたう首伸ばしをり若草と
競ひ合へるも春の光に

堺 永田 民子

生駒嶺のかすみに抱かれ我ひとり
強く生きむと誓ふ朝夕

東大阪 宝蔵寺京子

春霞漂ふごとく櫻咲く
園のシートに家族の宴

大阪 西脇 か津

車窓よりあかず眺むる春景色
さくらつゝに連山かすむ

神戸 太田たか子

傳統の茶道へ誘ふ温首相
古都にて寸時雪解けの春

大阪 中瀬 央子

三十六歌仙図（額） 束帯天神画像（軸） 舞楽胡蝶図（軸）

山本兆揚画伯 奉納

本年三月一日、山本兆揚画伯より、額装「三十六歌仙図」・掛軸「束帯天神画像」・掛軸「舞楽胡蝶図」が奉納されました。

当日、午前十一時より本殿において奉納奉告祭が執り行われました。奉告祭の後、山本兆揚画伯とご家族の皆様には、折りから参集殿で開催中の大盆梅展を拝観いただきました。

山本兆揚画伯は、貴重な石州和紙を入手され、その和紙に三十六歌仙図を三組、揮毫されました。

一組は伊勢神宮へ、一組は出雲大社へ奉納され、一組は、地元の大阪天満宮へ奉納いただいた次第です。

山本画伯は、大正十五年大阪市長



三十六歌仙の一 柿本人麿
ほのぼのと明石のうらの朝霧に鳥がくれ行くふねをしぞ思ふ



山本兆揚画伯ご夫妻 大盆梅展会場参集殿にて

日展に初出品をして、見事入選されました。日展入選を契機に日本画は打ち切り、以前から描き続けていた仏画にしほって制作し、佳い作品ができれば寺社に寄進させてもらおうと決心されたということです。

昭和五十六年から二十年の歳月をかけて、雁皮の紺紙に金とプラチナで、日本最大の両界曼荼羅を完成させ、平成十三年に大阪市東住吉区の真言宗泉涌寺派大本山法樂寺へ奉納されました。



舞楽胡蝶図

束帯天神画像

「梅を描いた引札展(Ⅱ)」開催

—梅まつり期間中 参集殿にて—

昨年、「大盆梅展」開催期間中、参集殿の長押の上に「梅を描いた引札」二三点を展示し、拝観の皆さんにご覧頂きました。本年の「大盆梅展」の開催中には「梅を描いた引札展(Ⅱ)」を開催して、昨年に倍する五〇点の引札を展示致しました。

梅を描いた引札をご提供下さったのは、紀州五代梅本舗株式会社東農園様です。同社では、梅に関する様々な資料をコレクションしておられ、梅を描いた引札もその一部です。



引札・無蓋ハイヤーの花嫁さん 木版機械摺り 明治末～大正期

天神天満花娘 本年度奉仕者決まる

去る六月五日、当宮参集殿において「天神天満花娘」の選考面接会が行われました。

大阪天満宮の参道でもある天神橋筋商店連合会では、毎年の天神祭にあわせて、商店街と天神祭のPR役として「天神天満花娘」を公募・選考しています。

今年も五〇名を超える応募者のなかから、書類選考、面接の後に九名



の花娘が選ばれました。花娘は、商店街のキャンペーンガールとしてだけではなく、当宮の天神祭や七夕祭はもちろん、今年から復興した「天神天満えびす祭」など、様々な行事にも参加して頂きます。そこで、本年から、選考会場を当宮内参集殿に移し、選考面接会、研修会が開催され、大阪天満宮代表も参加させていただきます。

今後、九名の花娘は、昨年の花娘、的場佐智子さんとともに様々な活動に取り組み、船渡御では、「にぎわい船」に乗船します。

津端道彦画伯の曾孫

去る二月十六日、当宮にゆかりの深い日本画家津端道彦画伯の曾孫にあたる内容仲子さんが、夫君泰彦さんと来宮され、曾おじいさんの作品とご対面されました。

津端道彦画伯は、明治元年新潟県中魚沼郡に生まれ、明治・大正・昭和にわたって、土佐派の大家として活躍し、その作品は美しい色彩と絶妙な表現で、天来独自の画風と気品に満ちています。当宮には、津端画伯の襖絵四枚「龍田川図」と杉戸絵「紅梅金鳩図」「紅葉白菊図」「麒麟図」「鳳凰図」など多数あります。なお、平成十三年十月には、津端



津端道彦画伯の襖絵「龍田川」の前で 内容さんご夫妻

しい木版手摺錦絵の引札が登場します。明治二十年代になると、大阪の印刷所が木版機械摺の技法を開発して、やがて大阪製の引札が全国を席卷することになりました。

今回展示した明治・昭和初期の五〇点の引札のうち、三九点が大阪製の木版機械摺のものです。

昔の大阪製引札が、盆梅とともに歴史ある参集殿に飾られると、レトロでステキな雰囲気になり、盆梅拝観にお越し下さった皆さんに喜んでいただきました。

内容仲子さん来宮

道彦画伯の弟席太郎氏の孫、津端淳一郎さん（埼玉県在住）が来宮され、画伯の作品をご覧になりました。

大正一〇年の陸渡御と船渡御を長尺の絵巻に描いた「夏祭船渡御図」「夏祭船渡御図」には、現在とは異なつた戦前の渡御風景が記録され興味深いものです。

なかでも、大阪四花街の芸妓さんたちによる「八処女（やおとめ）」は、一際目を引く華やかな行列として描かれています。かつて大阪には、南地・堀江・新町・北新地に花街があり、「色の新町、浮気な南、野暮な堀江に、実の北」と言うような独特の気風と伝統を伝えてきました。

ちょうど、この絵巻が描かれたころに撮られた渡御出発前の記念写真が伝えられますので、次頁にご紹介しましょう。戦前の風俗資料としても貴重なものです。

なお、南五花街の写真に写る後列中央の男性は「南地大和屋」の実質的創業者である坂口祐三郎です。坂口が、明

天神祭 陸渡御・船渡御に 四花街の芸妓による八処女が

治四三年に創設した「大和屋芸妓学校」は軍隊式の教育を採り入れて優秀な芸妓を育て

ますが、それにヒントを得た阪急電車の小林一三が「宝塚少女歌劇」に同様の教育方法を採用したというエピソードは有名です。



南五花街・八処女



堀江・八処女



新町・八処女



北新地・八処女



「天満天神えびす祭」を復興 「てんま天神梅まつり」も盛大に

本年一月九日～一日に「天満天神えびす祭」を復興いたしました。江戸時代、正月・五月・九月の「十日えびす」には天神祭に負けない賑わいをみせた当宮ですが、戦後まもなく本殿での神事だけを行うようになっていました。この度、神札、福笹、吉兆や、熊手、箕の、竹末広などの縁起物を授与する神賑行事の復興を計ったものです。年を追うごとに、往時の賑わいが戻ることを祈っております。

また、今年で四年目になる「てんま天神梅まつり」も二月一〇日～三月一日までの約一ヵ月間にわたって盛大に行われ、春の風物詩として定着しつつあるようです。特に今年は二月二日の夜間拝観に合わせて大蔵流狂言「盆山」を特別公演しましたところ、大変な好評をいただきました（男Ⅱ茂山千之丞、何某Ⅱ茂山宗彦、解説Ⅱ茂山あきら）。

ご協力いただきました氏子・崇敬者の皆様に、厚く御礼申し上げます。





新町・八処女



南五花街・八処女



北新地・八処女



堀江・八処女

高塚竹堂さんの三姉妹、来宮 「難波之碕顕彰碑」の揮毫書家

昨年十二月、東京にお住まいの長

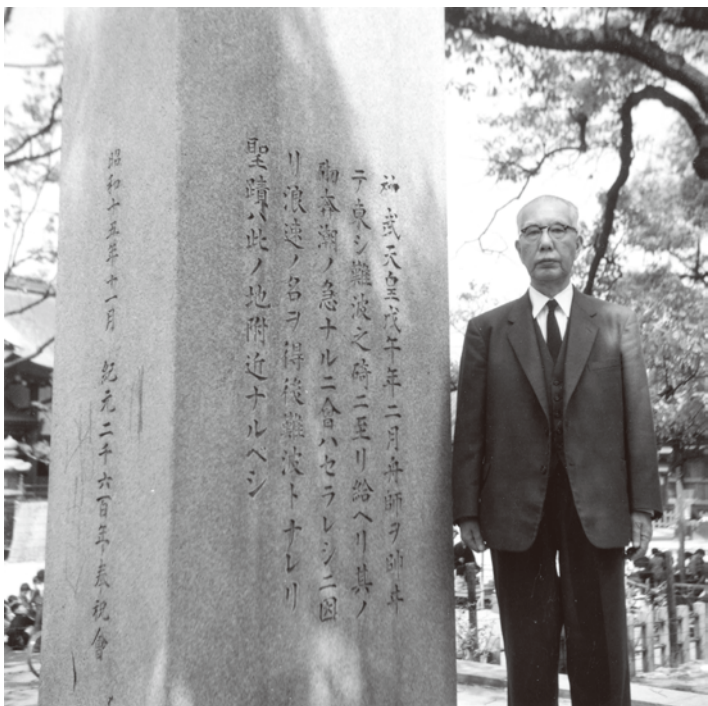
宮でした。

谷川澄霞さんから3姉妹が、当宮社務所を訪ねてくれました。姉妹のお父様は有名な書家の高塚竹堂さんで、当宮境内の「神武天皇聖蹟難波之碕顕彰碑」を揮毫されたご縁による来

宮でした。

十五年一月発行）にご紹介していますので、ご参照ください。
高塚さんは、明治二十二年（一八八九）に静岡県清水市に生まれ、小学校教員を経て、保険会社に勤務しながら、同郷の小野鷲堂に書道を学び、平安朝の仮名を研究されました。本名は錠二ですが、竹堂や笹舟と号されています。戊申書道会や東方書道会などの創立に尽力し、また、昭和八年（一九三三）の国定教科書「書

き方」にも揮毫されています。戦後は、日展の審査員や評議員、書道同文会会長などを歴任され、書道会の重鎮として活躍されました。昭和四十年（一九六五）には静岡市の鉄佛寺に喜寿胸像が建立され、四十二年には勲四等旭日章を受章されましたが、翌年に逝去されました。現在でも、書店に並ぶ『書き方字典』『書道三体字典』などの遺著によって、その書風を偲ぶことができます。



大阪天満宮青年親睦会

当宮には、天神祭を支える講社連合会をはじめとする、多種多様な組織がありますが、氏子地域の五〇歳までの男女五〇名による「青年親睦会」をご存じでしょうか。

同会は、平成十三年に結成された新しい組織ですが、寺井種治権宮司を中心とし、土居由憲会長のもと、様々な活動をしています。

定例の活動としては、毎月第一日曜日の朝八時から、境内（雨天の場

合は本殿内）の清掃を行い、また「てんま天神梅まつり」には「振る舞い餅つき」や、大晦日には白酒や御神籤の授与をご奉仕しています。
活動中の親睦会を見かけたら、気軽に声をかけ下さい。

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

一月課題「年頭即事」

芳水 荒瀧宏一

五雲爨黹此迎新

蓬戸雖貧無恙身

筆硯相親又椒酒

老來心緒十分春

（訓読）五雲爨黹して此に新を迎へ蓬戸貧なりと雖も恙無きの身 筆硯に相親み又椒酒に 老來の心緒 十分の春

（語釈）五雲Ⅱ五彩の雲。ここでは目出度い雲。爨黹Ⅱたなびくさま。蓬戸Ⅱヨモギで編んだ門。自分の家を謙遜して言う。

（詩意）お正月の目出度い雲がたなびく新年を迎えた。貧しき草の戸に住まう私なのですが無事に過ごしています。書き初めとかお屠蘇を嗜む、老人の心根は十分に春でございます。

二月席題「花信到来」分韻

得支 秋甫 樋口和子

早春梅信鳥先知

林下暗香紅一枝

探勝吟行塵外境

美人高士自清奇

（訓読）早春の梅信 鳥先づ知る 林下の暗香 紅一枝 勝を探り吟行す 美人高士自清奇

（語釈）暗香Ⅱどこからともなく漂ってくる香り。美人高士Ⅱ梅の形容。

（詩意）早春梅の便りを先ず知っているのは鳥でありましょう。どこからともなく香ってくるのは紅梅の一枝であろうか、景勝の吟行は俗世間の外で、梅の花は自ずから清らかである。

三月課題「新鶯報春」

瀬風 長岡廣明

橋邊疎柳軟於絲

出谷新鶯春報時

睨睨綿蠻聲不惜

只嘆片影近歸期

（訓読）橋辺の疎柳 糸よりも軟かなり 谷を出ずるの新鶯 春報ずるの時 睨睨 綿蠻 声惜まず 只嘆く片影 帰期に近きを

（語釈）睨睨Ⅱ鳥が目を大きく開いたさま。鳥の鳴き声の美しいさま。綿蠻Ⅱ小鳥の鳴く声。詩経の小雅の編名。片影Ⅱ鶯の影。

（詩意）橋のあたりのまばらに植えられた柳は軟らかい枝を垂れている。生まれたばかりの鶯が鳴き始める。ホーホケキョと惜しみなく声を出している。ただ心配なのは鶯が何処かへ行ってしまう事だけである。

五月席題「訪牡丹寺」

得歌 雪稜 松村曉二

牡丹名利郁香多

引杖廣庭絶世柯

恰似太眞傾國色

造化工哉九德歌

（訓読）牡丹の名利 郁香多く 杖を広庭に引けば 絶世の柯 恰も太眞傾国の色に似て 造化の工なる哉 九徳の歌

（語釈）名利Ⅱ立派なお寺。柯Ⅱ枝。ここでは牡丹に木。太眞Ⅱ楊貴妃のこと。造化Ⅱ天地自然を作った神様。転じて自然。奈良県の長谷寺を念頭に置いています。

（詩意）牡丹のお寺は香り高く。広いお庭のそここには世にも珍しい牡丹の花々。これは楊貴妃の国を傾ける程の美しさで、天地をお造りになった神様の数多の徳を歌っておられるようである。



天満天神研究会

◆第二五回天満天神研究会

去る三月一日、当宮文華館三階において開かれ、仏教大学の今堀太逸氏教授と、当宮文化研究所の高島幸次研究員の発表があった。

今堀太逸「日本国の災害と道真の霊」

菅霊が神格化されて崇敬される背景、および天満宮が創建され興隆される経過について、災害の歴史と仏教経典、神仏の創成の視点から考察された成果を、次の五章立てで発表された。①日本太政威徳天と道真、②醍醐天皇不遇と清涼殿霹靂、③北野廟堂の創建（鎮国と衆生守護）、④北野天満宮の神罰と霊験（北野天神縁起の成立）、⑤日本国の災害と善神捨国（日蓮と選択集）。

高島幸次「神酒天神から神酒笑姿（えみす）へ」

本年一月に復興された「天満天神えびす祭」にちなんで、寛政一〇年（一七九八）の『摂津名所図会』に記される「神酒笑姿」像について紹介された。同像は、御神酒をお供え

すると赤面するという伝承を持つが、先に同種の「神酒天神」像を考案した平賀源内と、当宮の渡邊吉賢（主税）の交流を踏まえて、「神酒天神」の影響を受けて「神酒笑姿」が生まれたと推測された。

◆第二六回 天満天神研究会

去る六月九日にも文華館において研究会が開かれ、大阪歴史博物館の伊藤純学芸員と、高島幸次研究員の発表があった。

伊東純「太子信仰における唐本御影」

法隆寺に伝来した「唐本御影」像を題材に、その伝来過程と、由緒の変遷をたどられました。特に嘉禎四年（一二三八）の顕真による「再発見」の意義を考察された。

高島幸次「天神祭におけるコミュニケーションの装置」

祭礼や正遷宮に登場する「お祭り提灯」「御迎人形」「造り物」などは、「口上」によって、他所からの参拝者とのコミュニケーションを計る装置としての役割を持っていたことを指摘された。

「文化サロン源内」参拝

渡辺主税宅を訪ねて

去る五月二〇日、香川県から「文化サロン源内」のご一行三〇余名が参拝されました。「文化サロン源内」は、さぬき市志度にある「平賀源内先生遺品館」におかれた文化サークルです。

参拝のきっかけは、当社報の前号（本年一月発行）に掲載された「蛭児尊の歴史」でした。同稿は、本年一月復興の「天満天神えびす祭」にちなんで掲載されたもので、江戸時代における当宮の十日戎では、御神酒を供えるとお顔が赤くなるという「神酒笑姿」が評判をとったこと、および同種の画像としては、平賀源内が発案したという「神酒天神」が有名であることを紹介したものです。

その後、高島幸次研究員は二月三日に同遺品館を訪ね、所蔵される「神酒天神」などの資料調査を行いました。このことが縁と

なっており、平賀源内が、当宮の渡辺主税（吉賢）を訪ねていたことが明らかにになりました。

そこで「文化サロン源内」の皆さんは、源内の「有馬紀行」にゆかりの地を訪ねた後に、当宮を参拝されたという訳です。一行は本殿参拝の後に、渡辺主税宅のあった星合池近くに移動し、源内が訪ねた時代に思いをさせていました。



文化サロン源内・総会現地研修の旅「三田徳・有馬温泉・大阪天満宮社前にて」 2007. 5. 20.

人事任免

《新任》

平成十九年四月一日付



出仕 白江 秀宣
(24歳)



出仕 中西 佑
(21歳)



出仕 湯浅 迪彦
(22歳)



巫女 加美山貴与子
(18歳)

《退職》

平成十八年十二月三十一日付

出仕 齋木 国保

巫女 小西 恵
巫女 松田 麻衣

《講社人事》

天神講獅子

去る二月、森本幸一氏が新講元に就任されるとともに、講名もこれまでの「天神講」を「天神講獅子」と改め、心機一転されました。

大阪天満ライオンズクラブ奉仕講 去る七月、これまでの皆元公平氏に代わり、神原茂氏が新講元に就任されました。

《帰幽》

三月十一日

神鉾講・元講長

満仲春雄（享年86歳）

三月二十八日

御錦蓋講・副講元

中本正一（享年58歳）

「天神祭」「大阪天満宮」のフレーム切手



この度「天神祭」と「大阪天満宮」の「フレーム切手」が製作され、販売されています。
 フレーム切手とは、
 個人や団体が自由に
 好みの写真を切手と
 して製作できるサー
 ビスで、昨年九月か
 ら日本郵政公社が始
 めたものです。

「天神祭」切手は、
 日本郵政公社近畿支
 社の製作によるもの
 で、銚流神事、催し



場面が採り上げられています。
 一方の「大阪天満宮」切手は、サ
 ンケイスポーツの企画・販売で、絵
 馬奉納、登竜門、十二支方位盤、大
 將軍社、本殿外観、本殿、梅と燈籠、
 天神祭、鎮花祭、梅花殿の一〇場面
 からなっています。

初版切手の贈呈式

去る六月二十五日二時から、当宮
 で初版切手の贈呈式が行われ、此花
 西九条郵便局の岡田太計雄局長から、
 寺井種治権宮司に手渡されました。

現在、市内の郵便局で販売されて
 います。価格はともに、一シート(八
 〇円切手×一〇枚) 一二〇〇円です。



編集後記

来る九月二六日は、日タイ修好宣
 言が調印されて一二〇周年にあた
 ります。明治二〇年九月二六日の調印
 時には、タイ国は「暹羅(シヤム)」
 と称していましたから、同宣言の正
 式名は「日暹(にちせん) 修好通商
 に関する宣言」でした。これを記念
 して今年の天神祭・船渡御には「タ
 イ国奉拝船」が参加されます。また、
 非公式ですが「天神祭 in バンコク」
 の話も漏れ聞こえます。

日タイ両国は、皇室・王室を戴く
 共通点を持ち、調印以来友好関係を
 保ち続けてきました。天神祭が両国
 の一層の交流を深めることになれば
 うれしいことです。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第52号

平成19年7月20日印刷

平成19年7月25日発行

発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18

TEL 06-6353-0002 5

印刷所 木村印刷株式会社